

# 北陸における弥生時代の拠点集落について

安 英樹

## 1. 序 論

「拠点集落」という言葉をご存知だろうか。考古学においては主に弥生時代の遺跡に対して使われる用語であり、遺構や遺物の質・量が優れた遺跡に対して形容詞的に付与されていることが多い。では、「拠点集落」とは具体的にどういう内容のものを指すのだろうか。

「拠点集落」の内容については、1980年代に二つの論考で明記されており、引用することができる。一つは、田中義昭<sup>\*1</sup>によるものであり、関東地方の集落において、竪穴建物の数や遺跡の規模が卓越する拠点（的）集落とそれ以外の周辺（的）集落に分類し、長期・短期・継続・断続といった消長と組み合わせた集落類型を設定した。さらに近年は、集落分岐の母体、生産・交易の拠点、首長の居住といった性格が拠点集落に付帯することを指摘している。もう一つは、酒井龍一<sup>\*2</sup>によるものであり、近畿地方中央部及び瀬戸内海北岸地域において、多数の拠点集落が社会を構成する基本要素とした上で、その規模・構造をモデル化した。さらに、拠点集落の面・線的な分布状況から、地域の物流や情報伝達に機能しつつ集落の結合を強めるネットワークの存在を想定している。

田中と酒井の論考は、それぞれの地域で社会構造の分析に大きく寄与しているが、両者の概念は必ずしも一致するものではない。これは見解の相違とするよりは、地域によって集落の立地から消長、構造、さらには社会に至るまでが異なる様相に起因しており、それぞれの地域像が端的に描き出されていることに注目すべきと考える。地域によって弥生文化が伝播するプロセスが様々な要因で異なることが想定される以上、ひとくちに拠点集落といつても、画一的な姿となる必然性はなかろう。

では、これら以外の地域で拠点集落の様相はどうかといえば、意外にもほとんど検討されておらず、明確な定義もないまま漠然と言葉だけが使用されている観があり、それは北陸地方も例外ではない。今後は、集落研究の混乱を防ぎつつ、深化させるためにも、地域の実情に即して集落を検討する必要性が強く感じられよう。本論は、この視点に立って、北陸地方の代表的な弥生時代の集落とその周辺の様相を検討し、当地域の社会とその構造、その変遷について考えてみたものである。

## 2. 事例紹介

以下、本論で用いる時期区分は、前期を、中期を～、後期をとする弥生時代～期（様式）とする。中期については、凹線文出現の前後で二分するものとし、その前半を～、後半をとする。後期については、前半と後半に大別する。なお、これ以降の時期については時代の枠を超えていくが、庄内式並行期を、布留式並行期をとして参照することにしたい。

さて、北陸地方、中でも旧国の大賀・能登で構成される石川県下において、弥生土器の様相に見るような西日本系統の情報を核として構成される弥生文化が波及・定着するのは、弥生時代前期から中期の前半にかけての時期と想定される<sup>\*3</sup>。この時期に西日本各地との活発な交流がうかがえる事例としては、2つの遺跡を選択できる。一つは南加賀の八日市地方遺跡、もう一つは南能登の吉崎・次場遺跡であり（第1図）、どちらも石川県を代表する弥生時代の集落遺跡である。まずは、その内容について紹介したい。

### （1）八日市地方遺跡<sup>\*4</sup>

調査の沿革 昭和5年に発見され、昭和25年・昭和36年の発掘調査で櫛描文系土器の標識的な遺跡として周知されるようになった。近年は平成5年度から現在まで継続して大規模な発掘調査が行わ

れ、多くの成果が得られている。現在までに判明している遺跡の範囲はいくつかの情報を総合すると100,000m<sup>2</sup>を超える面積が想定される<sup>5</sup>。

**地形と立地** 小松市街地の東端部に位置し、梯川の下流部と、木場潟から日本海へ注ぐ前川に挟まれた平野部の微高地に立地する。かつては旧今江潟・柴山潟も含めた旧加賀三湖と梯川が合流して日本海へ連絡していたという（第2図1）。

**遺跡の消長** 遺跡そのものは縄文時代後期から弥生時代後期まで存続するが、遺構・遺物量から見て弥生時代～期が集落としてのピークで、期は墓域のみとなり、期に至ると完全に廃絶する（第1表）。

**主要遺構** 遺跡の中央に大規模な自然河川が存在し、平地式建物・掘立柱建物・方形周溝墓・井戸・溝・土坑等、現在までに確認されている多くの遺構はその両岸に高い密度で展開する。溝については遺構の集中域を囲んで画するように検出されたものがあり、環濠と推定されている（第3図）。

**主要遺物** 膨大な量が出土している。土器は期に遠賀川系土器、～期に櫛描文系土器といった、西日本系の弥生土器が波及・定着する過程を見ることができ、搬入品も確認できる。木器・木製品は農具から容器まで多種多様なものが出土しているが、未製品も同様に確認されており、盛んに生産されている（写真1・2）。玉についても、多くの製品・未製品（第4図）工具等の出土から緑色凝灰岩製<sup>6</sup>の管玉、翡翠製の勾玉が生産されている。また、銅鐸形土製品（第5図54）分銅形土製品（同55～59）鳥形土器、絵画土器（同53）鳥形木製品・魚形木製品など、祭祀具については素材を問わず多く出土している。

**周辺の遺跡** 八日市地方遺跡に関する水系は、同遺跡を中心として半径10km前後の範囲に及び、周辺の遺跡は至近の梯川流域、その支流の八丁川流域、同じく鍋谷川流域、旧加賀三湖の沿岸域<sup>7</sup>の各群に分布を大別できる（第2図A～D）。～期の遺跡は、至近の梯川鉄橋遺跡（2）や、梯川流域では白江梯川遺跡（4）、鍋谷川流域では千代才オキダ遺跡（12）や牛島ウハシ遺跡（17）、旧加賀三湖沿岸域では柴山出村遺跡（28）がある。八日市地方遺跡に比べるときわめて小規模で、遺構・遺物が少ないのが特徴的である。期には八丁川流域で銭畠遺跡（20）、鍋谷川流域で大長野A遺跡（15）、旧加賀三湖沿岸域で猫橋遺跡（30）などが確認され、期には八丁川流域で松梨遺跡（21）、鍋谷川流域で一針B遺跡（14）、梯川流域で平面梯川遺跡（3）、旧加賀三湖沿岸域で弓波遺跡（31）が確認される。

～期に至ると八丁川水系で高堂遺跡（22）、鍋谷川流域で千代・能美遺跡（13）、梯川流域で漆町遺跡（5）などが確認される（第1表）。期以降の遺跡は複数の建物を含む定量の遺構・遺物を伴っている。また、複数の水系に分かれたブロックを形成して分布し、新しい時期ほど水系のより上流に位置する傾向が顕著である<sup>8</sup>。

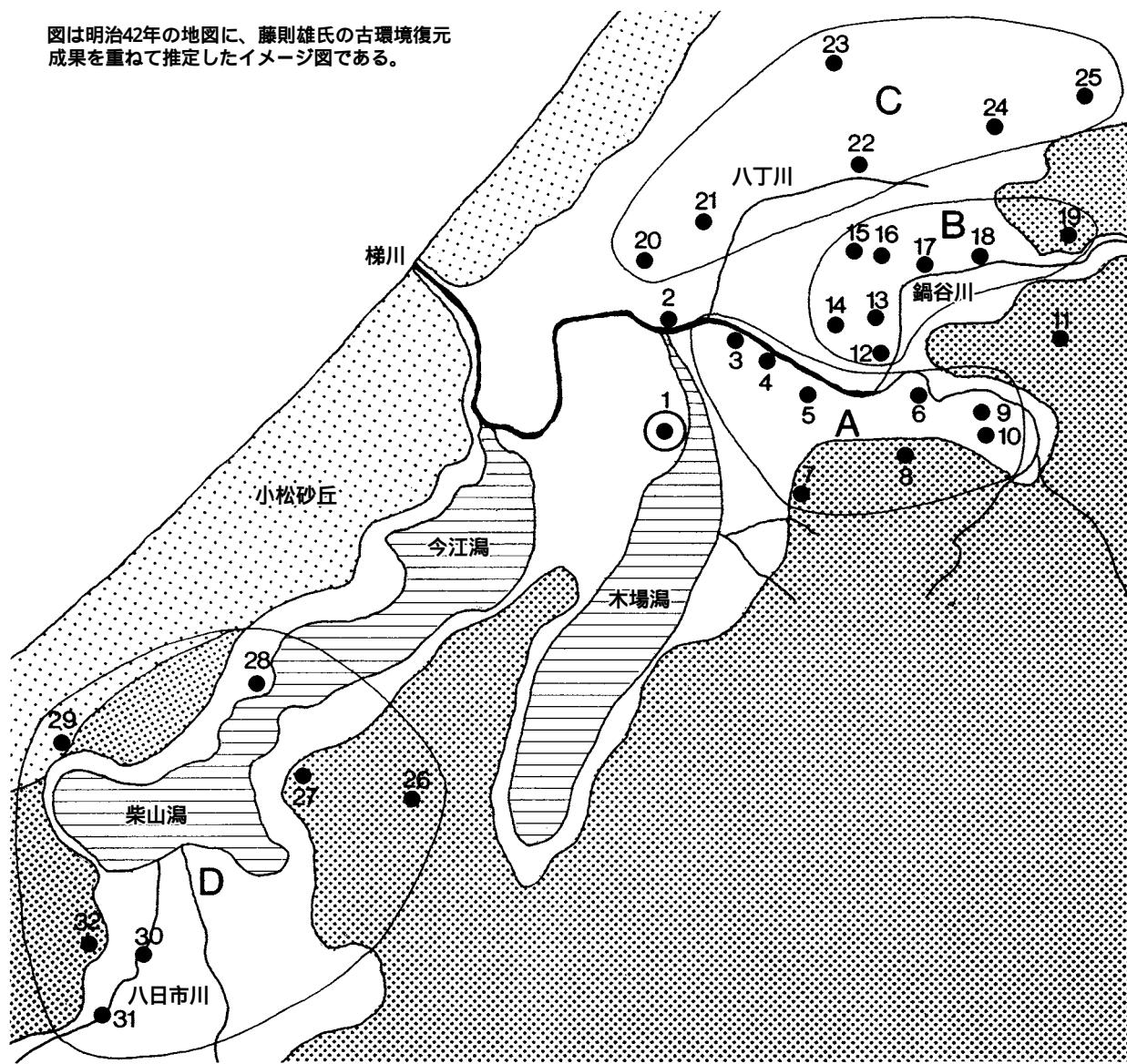
## （2）吉崎・次場遺跡<sup>9</sup>

**調査の沿革** 昭和27年の発見以降、様々な原因で現在までに18次に及ぶ発掘調査が実施され（第7図）、県下の弥生文化研究に多くの資料を提供してきた。その間、昭和58年には国指定史跡となり、平成11年には復元家屋を含む吉崎・次場弥生公園としての史跡整備が完成している。遺跡の範囲は200,000m<sup>2</sup>近くの面積が推定されている。



第1図 遺跡の位置  
(S = 1 / 2,000,000)

図は明治42年の地図に、藤則雄氏の古環境復元成果を重ねて推定したイメージ図である。



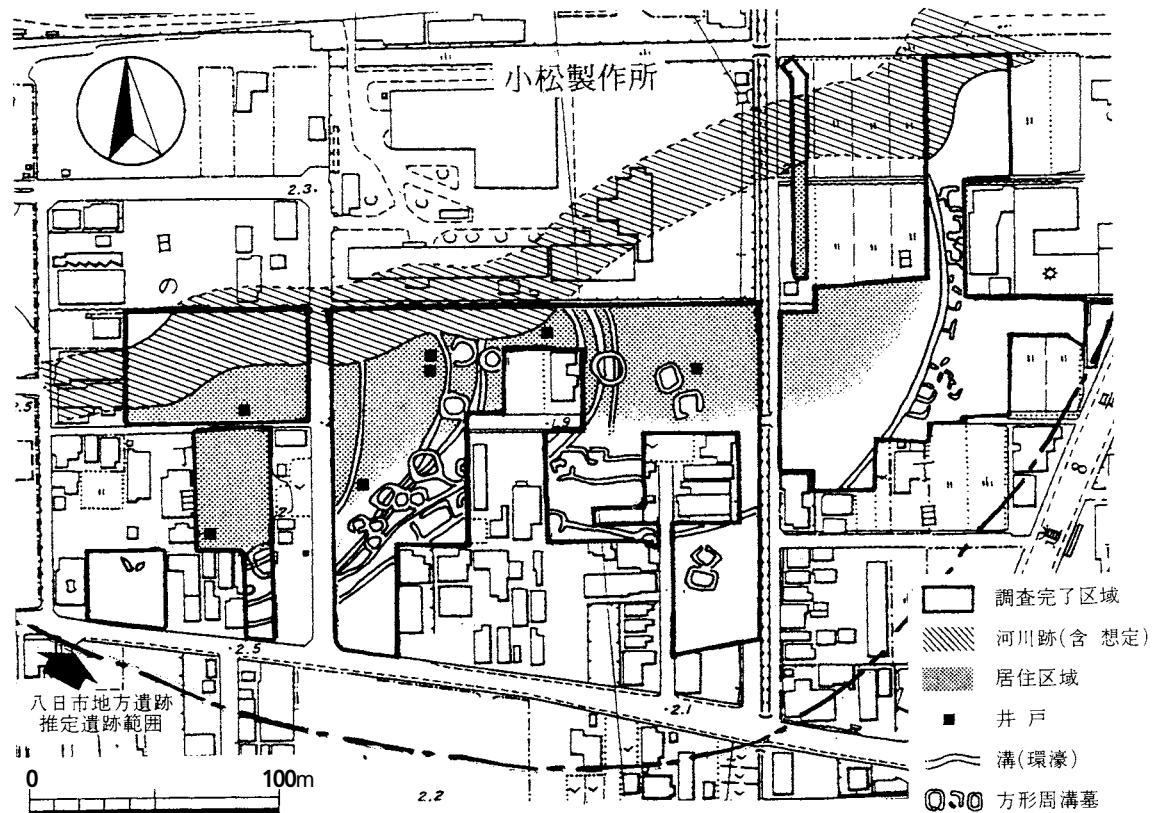
第2図 南加賀 八日市地方遺跡とその周辺 (S = 1 / 100,000)

群	No.	遺跡名	I	II	III	IV	V	VI	VII
一	1	八日市地方							
一	2	梯川鉄橋							
	3	平面梯川					—		
	4	白江梯川		—					
A	5	漆町 (群)					—		
梯	6	佐々木アサバタケ					—		
川	7	吉竹					—		
	8	八幡					—		
	9	荒木田					—		
	10	軽海西芳寺					—		
一	11	河田山					—		
B	12	千代才オキダ	—						
鍋	13	千代・能美							
谷	14	一針B							
川	15	大長野A							
	16	千代デジロA					—		

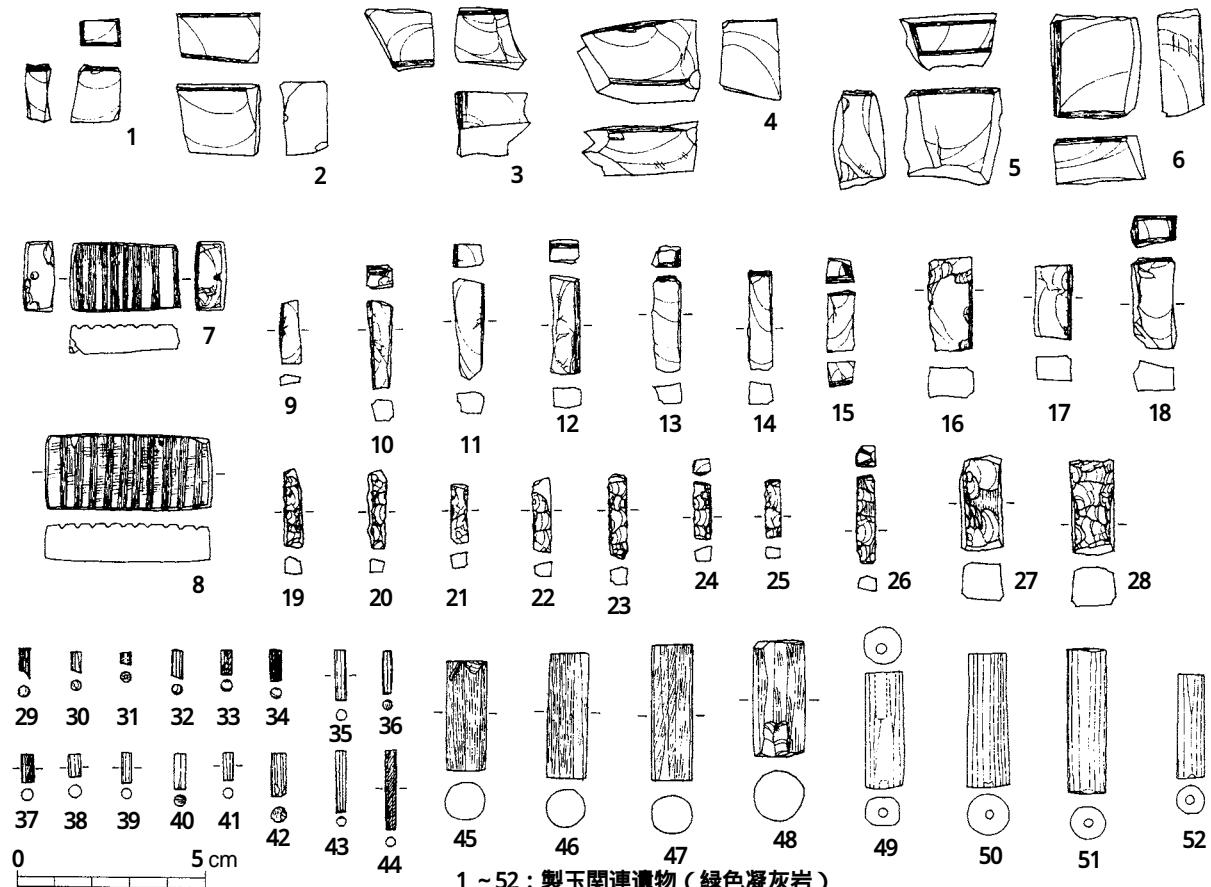
群	No.	遺跡名	I	II	III	IV	V	VI	VII
	17	牛島ウハシ	—						
B	18	佐野A					—		
	19	八里向山 (群)					—		
	20	銭畠				—			
C	21	松梨	—						
八	22	高堂							
丁	23	中庄							
川	24	和田山下							
	25	高座					—		
D	26	念仏林南							
旧	27	額見町西					—		
加	28	柴山出村		—					
賀	29	新堀川							
三	30	猫橋				—			
湖	31	弓波						—	
	32	片山津玉造							

第1表 南加賀 主要遺跡消長表

太線：遺構 or 遺物多 細線：少



第3図 八日市地方遺跡の発掘調査状況 (S = 1 / 3,000) 小松市教委調査分のみ



第4図 八日市地方遺跡出土遺物 (S = 1 / 2)

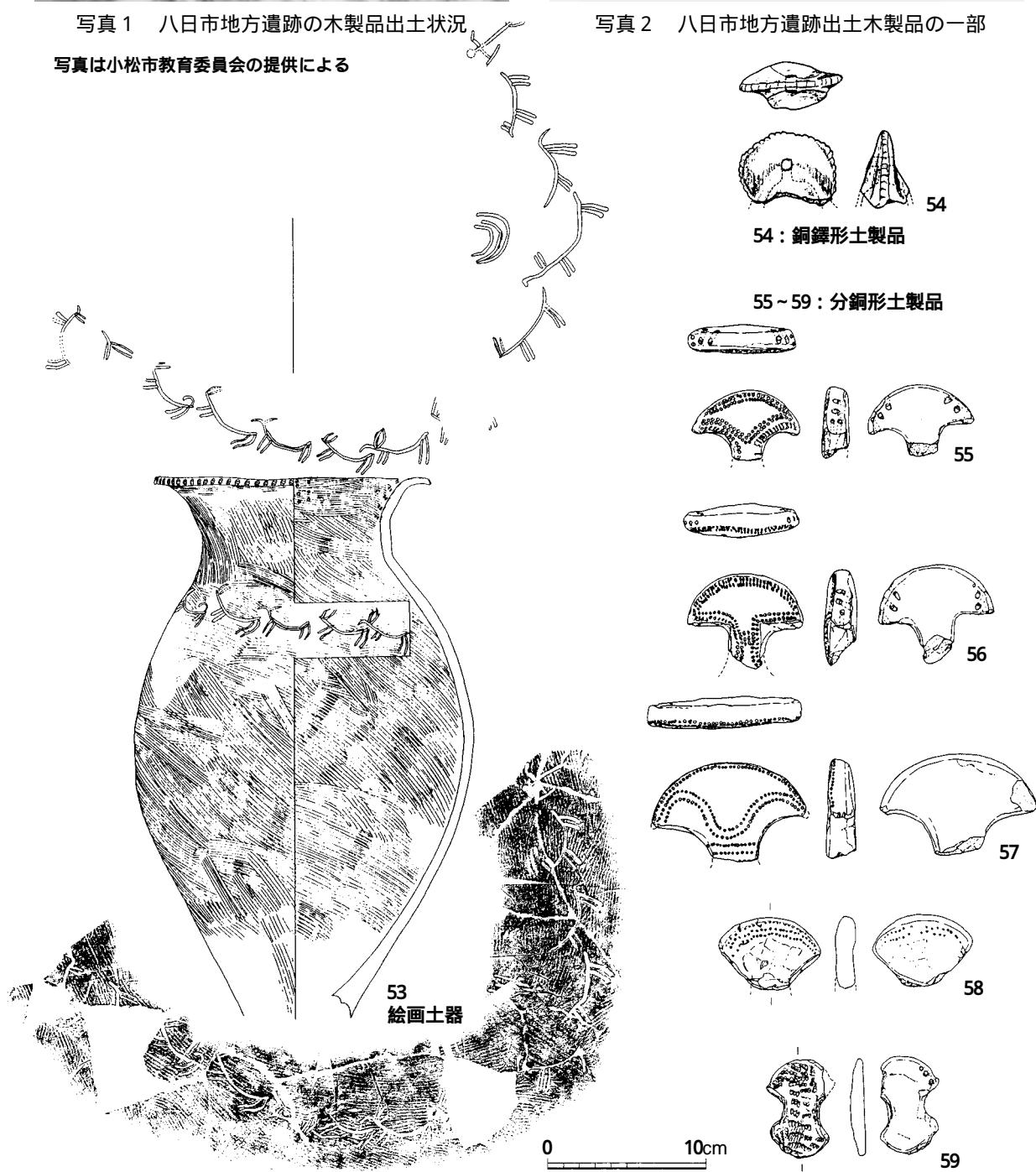


写真1 八日市地方遺跡の木製品出土状況

写真は小松市教育委員会の提供による



写真2 八日市地方遺跡出土木製品の一部



第5図 八日市地方遺跡出土遺物 (S = 1 / 4)

**地形と立地** 羽咋市街地から北東に約2km離れた平野部に位置する。子浦川と、邑知潟から日本海へ流れる羽咋川に挟まれた平野部の微高地に立地する。かつての邑知潟は広大な潟湖であり、眉丈台地裾部から日本海へ連絡していたという（第6図1）。

**遺跡の消長** 遺跡そのものは弥生時代前期から古墳時代前期まで存続するが、中心となるのは～期であり最も広域に遺物が分布する。遺構・遺物は、期には不明確になり、期以降また見られるが、期後半以降は中心地点を南へ変えており、規模も小さくなっているようである（第2表）。

**主要遺構** 平地式建物・掘立柱建物・溝・土坑等が現在までに確認されており、土坑には木棺墓と推定できる木質が遺存する遺構が含まれる。溝については建物等の遺構が集中するエリアを直線的に区画するように走る大溝が検出されている（第8図）。

**主要遺物** 多量に出土している。土器は、期に遠賀川系土器、～期に櫛描文系土器といった、西日本系の弥生土器が波及・定着する過程を見ることができ、搬入品も確認できる。石器では太形蛤刃石斧の未製品（第10図39～43）が多量に出土している。加えて柱状片刃石斧未製品の出土例（同44）<sup>\*10</sup>もあり、大陸系石器の生産が確認できる。玉についても緑色凝灰岩製の管玉、翡翠製の勾玉の生産が確認できる（第9図）。また、金属器については～期に鉄斧（第9図38）<sup>\*11</sup>、期以降には銅鐸の鋳型外枠と推定される土製品（第11図54・55）<sup>\*12</sup>や銅鏡が出土している。祭祀具については銅鐸形土製品（第11図64）、分銅形土製品（同65～67）、絵画土器などが出土している。

**周辺の遺跡** 吉崎・次場遺跡に關係する水系は、同遺跡を中心として半径10km前後の範囲に及び、周辺の遺跡は子浦川流域、眉丈台地（羽咋砂丘北部も含む）邑知地溝帯<sup>\*13</sup>の各群に分布を大別できる（第6図A～C）。～期はきわめて希薄な分布を示すが、～期は、眉丈台地で柴垣須田遺跡（10）、邑知地溝帯で杉谷チャノバタケ遺跡（13）や徳丸遺跡（14）、久江ツカノコシ遺跡（19）などが確認される。期には子浦川流域で太田ニシカワダ遺跡（2）、二口かみあれた遺跡（3）、萩市遺跡（5）、眉丈台地で寺家遺跡（8）、柳田うわの遺跡（9）、邑知地溝帯で藤井サンジョガリ遺跡（17）、久江ツカノコシ遺跡などが確認される。～期に至ると子浦川流域で太田ニシカワダ遺跡、二口かみあれた遺跡、眉丈台地で滝谷八幡社遺跡（11）、邑知地溝帯で谷内ブンガヤチ遺跡（12）、小田中おばたけ遺跡（18）、羽咋砂丘南部で粟生シモデ遺跡（6）などが確認される（第2表）。遺跡は、期以降増加し、水系の及ぶ範囲に複数のブロックを形成して展開する<sup>\*14</sup>。

### 3. 比較・検討

では、事例とした2つの遺跡について、集落を構成する上で重要な要素を比較してみたい。ここで列記する要素は、前節で紹介した順に、地形と立地、遺跡の消長、主要遺構、主要遺物、周辺の遺跡である。ただし、両遺跡とも調査条件や整理・報告書の刊行状況等の諸制約から、必要な情報の全てを得ることが難しいので、現在判明している限りの状況をもとにした大まかな対比とする。

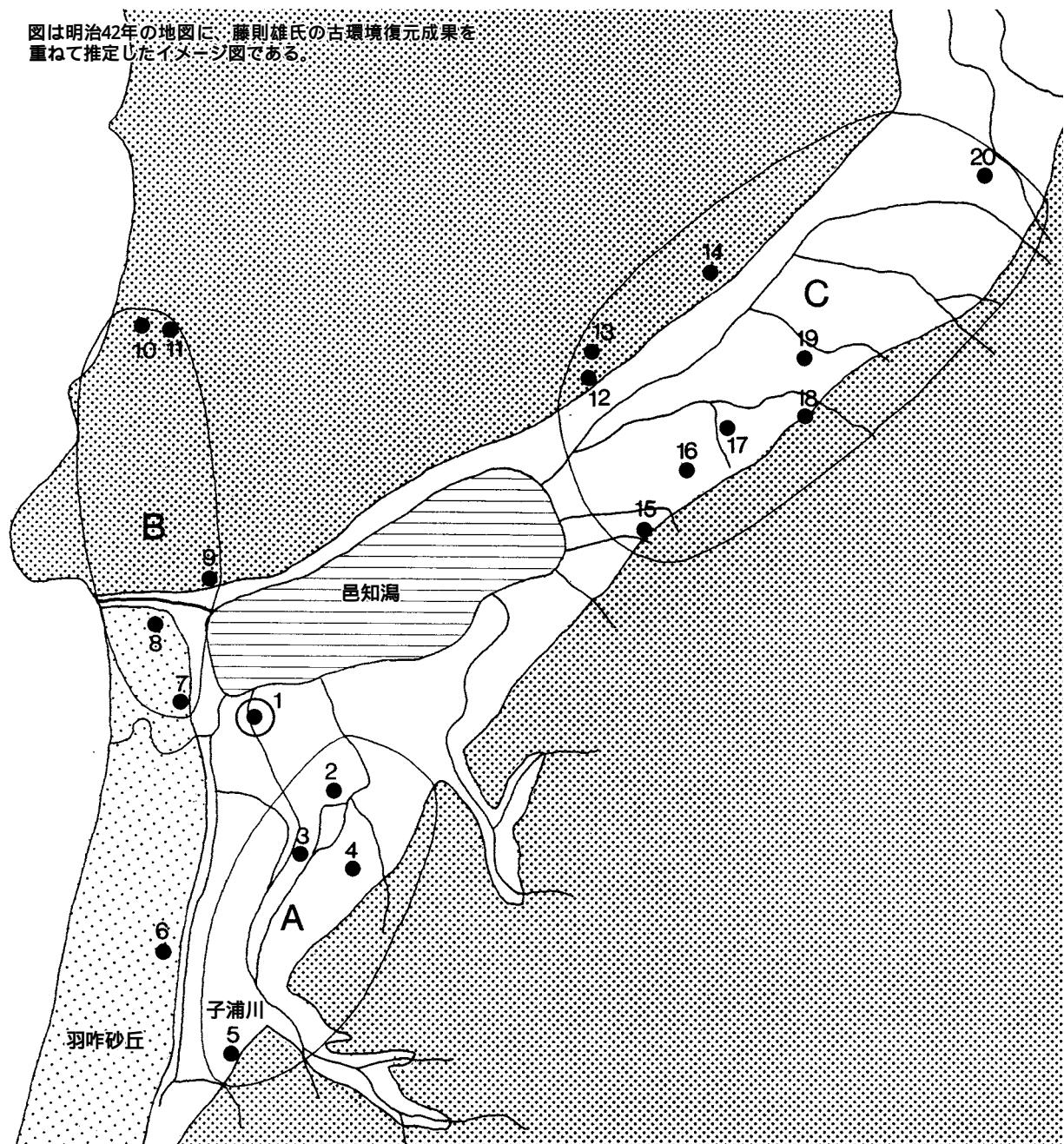
#### （1）地形と立地

2つの遺跡は、水田に適した低湿地に位置しながら、その中で安定した微高地を選択して遺跡が営まれていることは、弥生時代の集落に必要な条件を満たしている。そしてさらに重要なことは、潟湖と主要河川の合流点に近接する平野部の微高地に立地し、その下流はすぐに河口となり日本海に面するという環境において、全く共通する点である。この位置は日本海、河口、潟湖、河川諸水系といった水上交通網の結節する地点であり、地域の内外を問わず交通の要衝と言えよう<sup>\*15</sup>。

#### （2）遺跡の消長

期は2遺跡とも遠賀川系土器の出土に見るように、西日本から弥生文化の情報が伝わってきてお

図は明治42年の地図に、藤則雄氏の古環境復元成果を重ねて推定したイメージ図である。



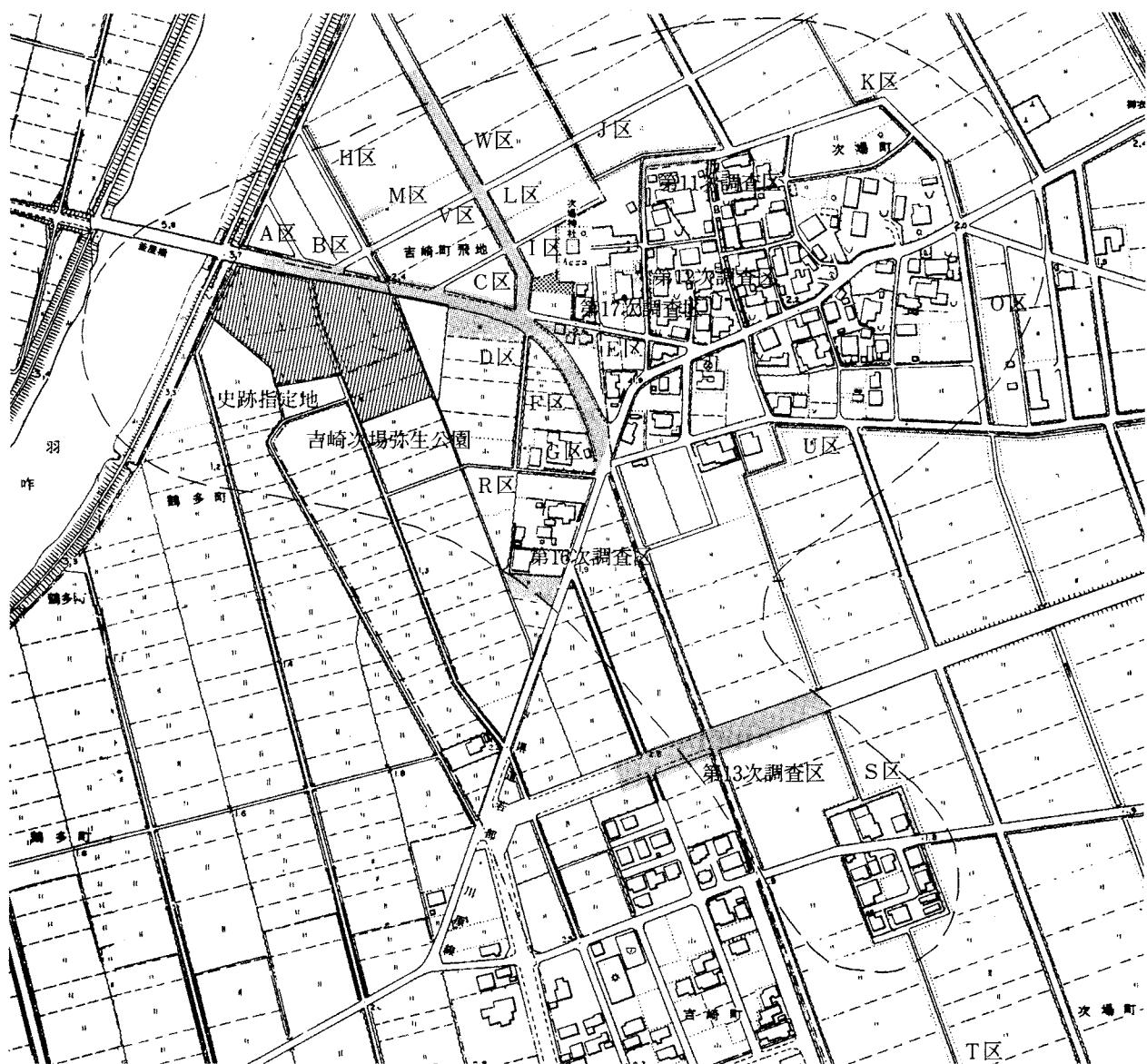
第6図 南能登 吉崎・次場遺跡とその周辺 (S = 1 / 100,000)

群	No.	遺跡名	I	II	III	IV	V	VI	VII
一	1	吉崎・次場	—	—	—	—	—	—	—
A	2	太田ニシカワダ	—	—	—	—	—	—	—
子	3	二口かみあれた	—	—	—	—	—	—	—
浦	4	杉野屋ろくばわり	—	—	—	—	—	—	—
川	5	荻市	—	—	—	—	—	—	—
一	6	粟生シモデ	—	—	—	—	—	—	—
B	7	釜屋	—	—	—	—	—	—	—
眉	8	寺家	—	—	—	—	—	—	—
丈	9	柳田うわの	—	—	—	—	—	—	—
台	10	柴垣須田	—	—	—	—	—	—	—

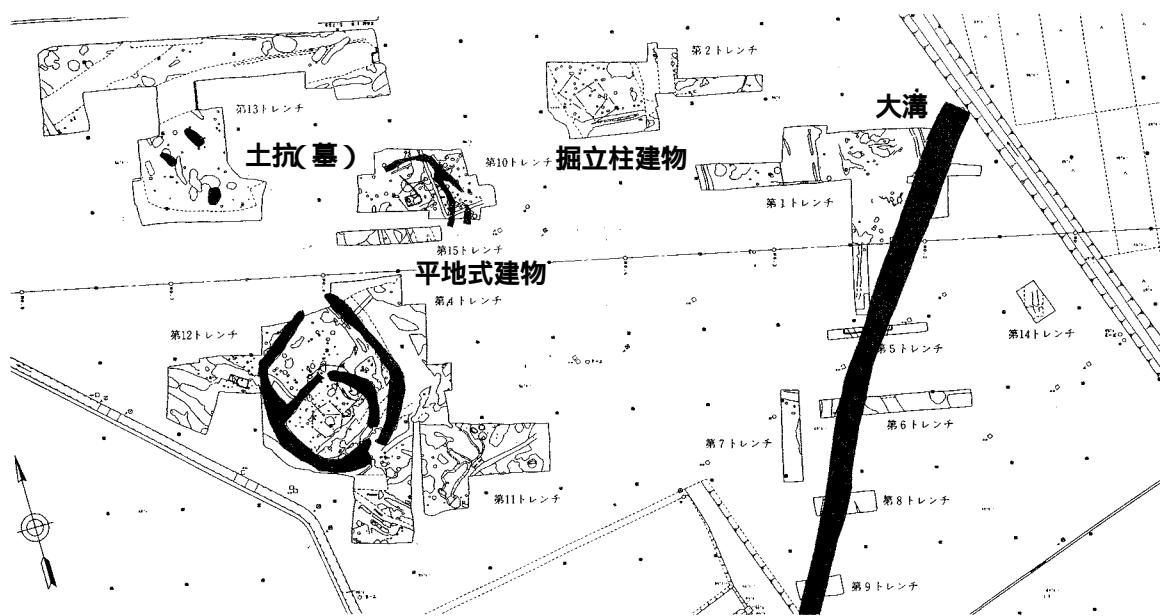
群	No.	遺跡名	I	II	III	IV	V	VI	VII
B	11	滝谷八幡社	—	—	—	—	—	—	—
	12	谷内ブンガヤチ	—	—	—	—	—	—	—
C	13	杉谷チャノバタケ	—	—	—	—	—	—	—
呂	14	徳丸	—	—	—	—	—	—	—
知	15	四柳白山下	—	—	—	—	—	—	—
地	16	曾祢C	—	—	—	—	—	—	—
溝	17	藤井サンジョガリ	—	—	—	—	—	—	—
帶	18	小田中おばたけ	—	—	—	—	—	—	—
	19	久江ツカノコシ	—	—	—	—	—	—	—
	20	徳前C	—	—	—	—	—	—	—

第2表 南能登 主要遺跡消長表

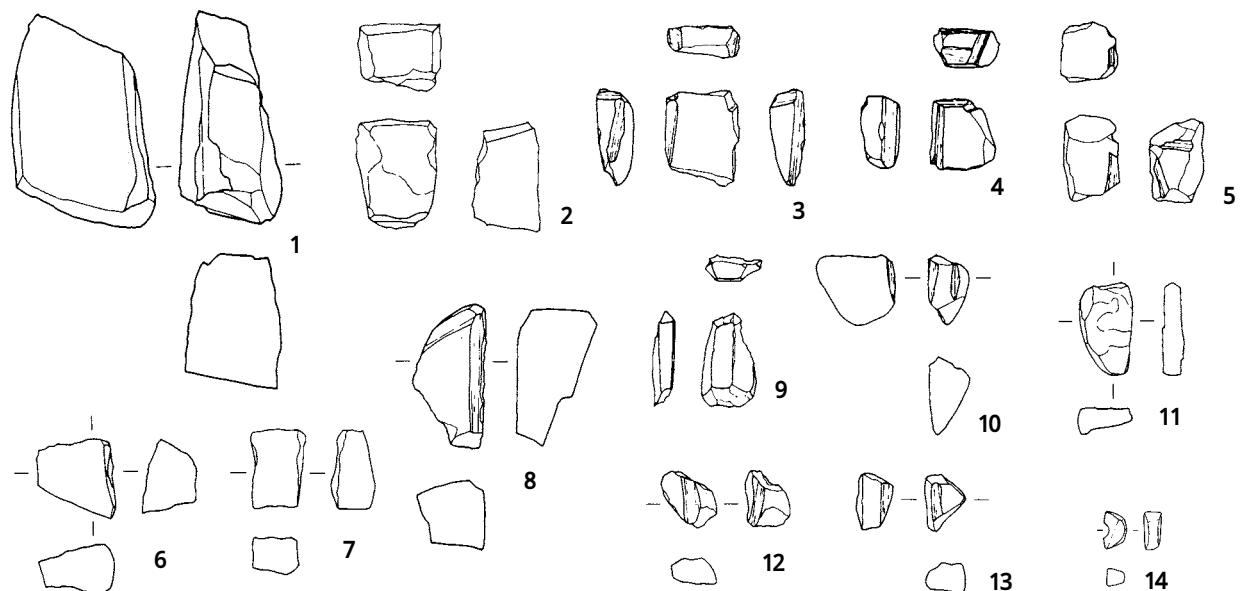
太線：遺構 or 遺物多 細線：少



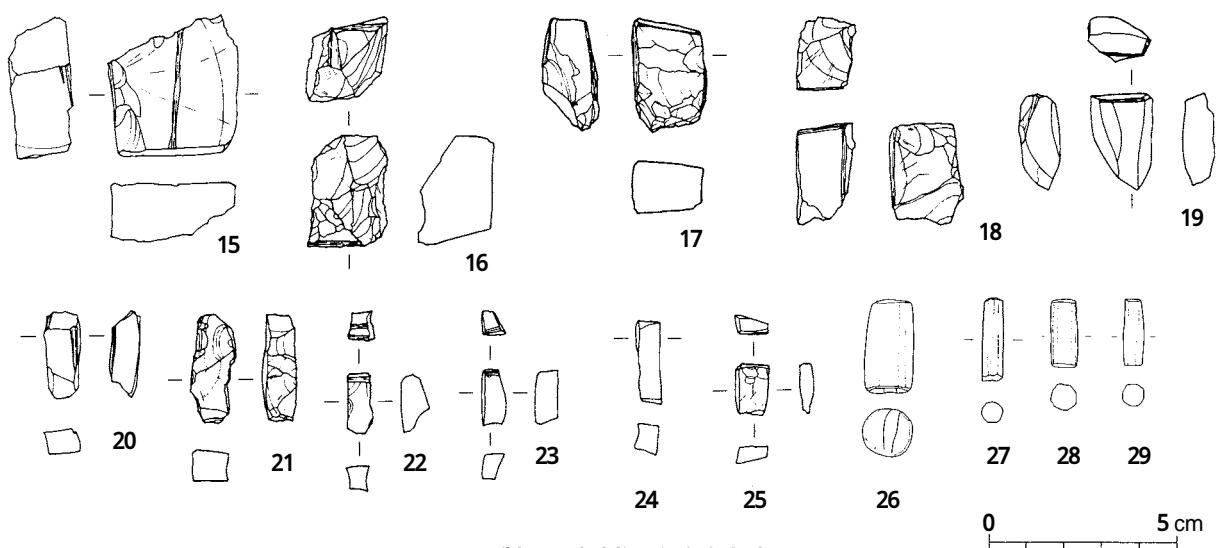
第7図 吉崎・次場遺跡の発掘調査状況 (S = 1 / 5,000)



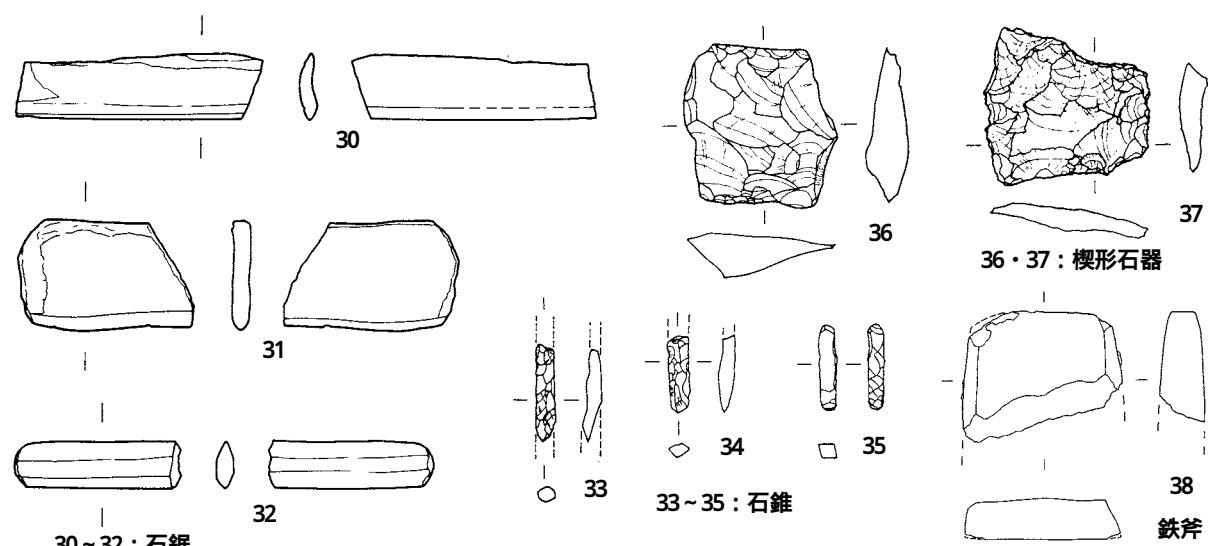
第8図 史跡指定地の発掘調査状況 (S = 1 / 1,000)



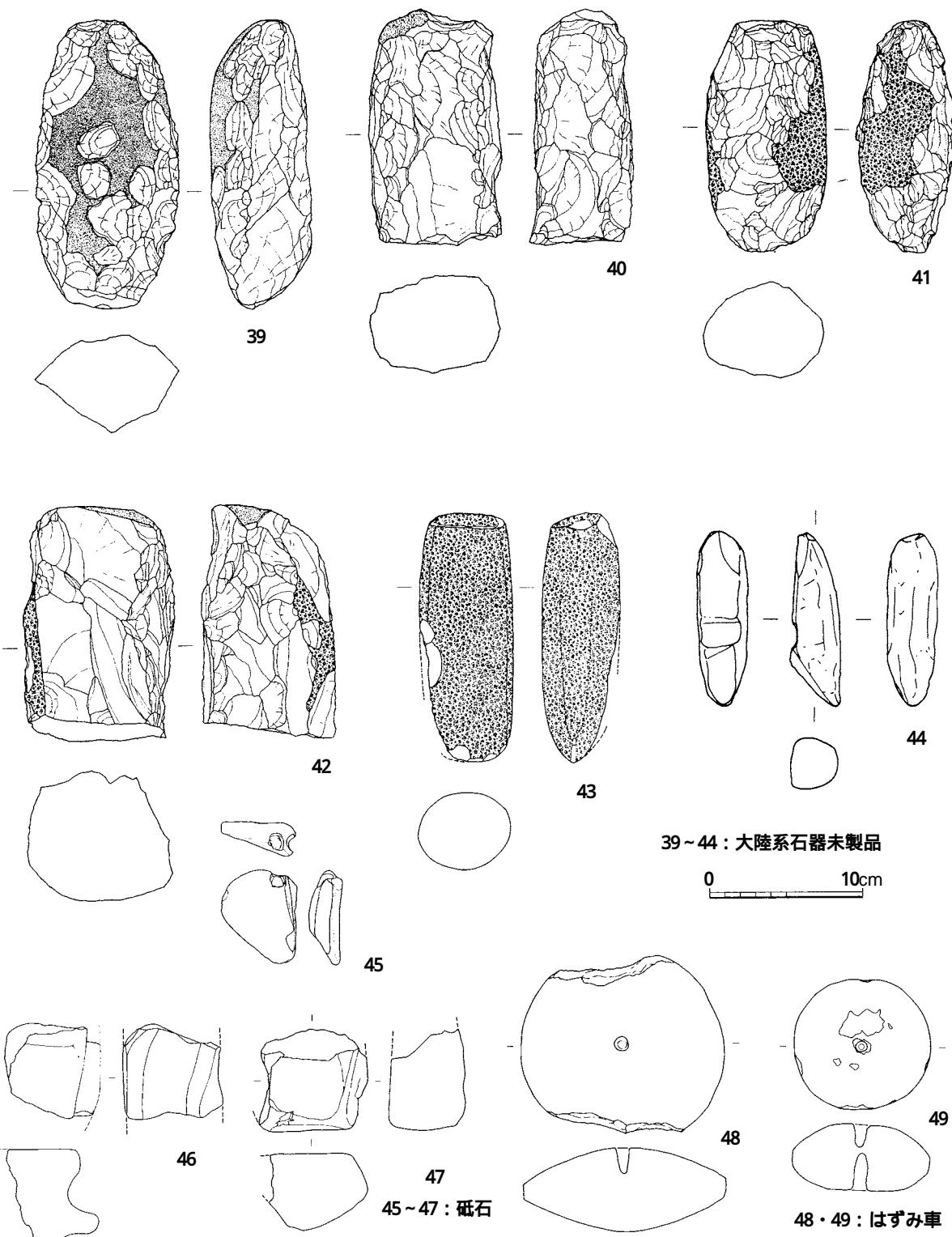
1 ~ 14 : 製玉関連遺物 (翡翠)



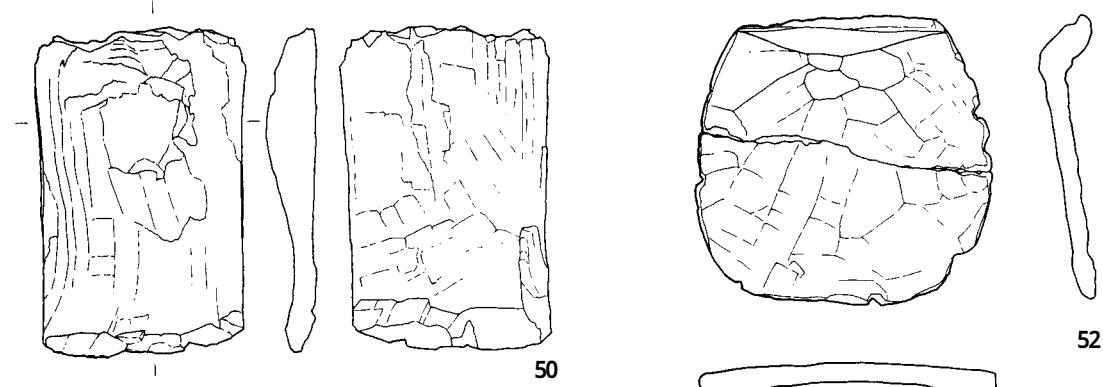
15 ~ 28 : 製玉関連遺物 (緑色凝灰岩)



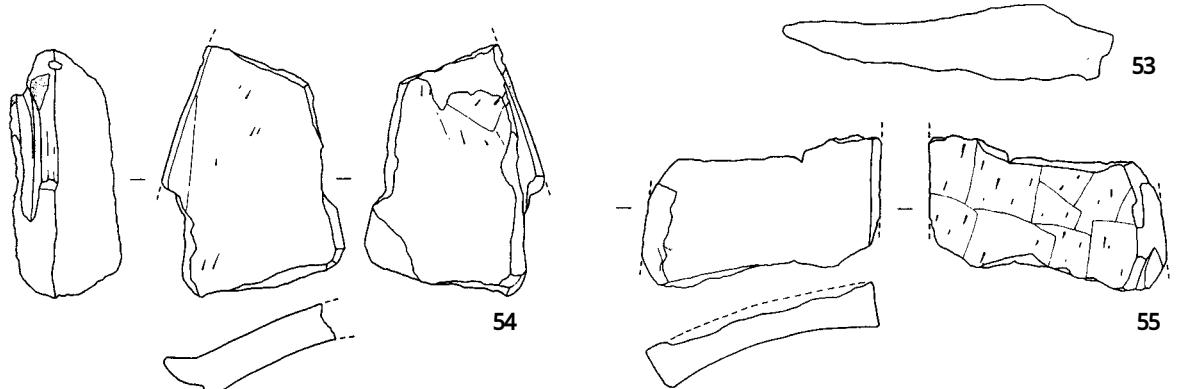
第9図 吉崎・次場遺跡出土遺物 (S = 1 / 2)



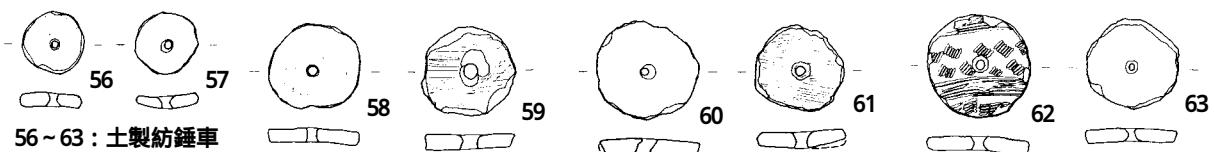
第10図 吉崎・次場遺跡出土遺物 (S = 1 / 4)



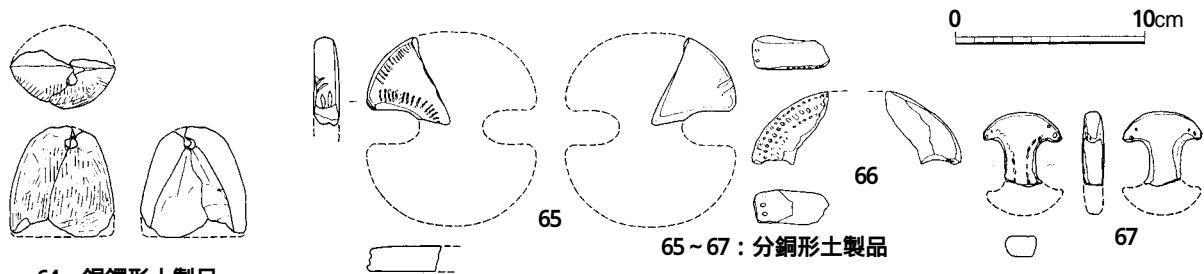
50~53：鍛未製品



54・55：土製鋳型外枠



56~63：土製紡錘車



64 銅鐸形土製品

第11図 吉崎・次場遺跡出土遺物 (木製: S = 1 / 6、土製: S = 1 / 4)

り、集落の成立が予想されるが、遺構の形成は顕著ではない。～期は、2つの遺跡ともに集落のピーク期となる。期以降は一見すると異なった営みが見られる。すなわち八日市地方遺跡は方形周溝墓群の活発な造営や居住域の消失が起き、期を迎えるとすぐに廃絶する。吉崎・次場遺跡では遺構・遺物が希薄化するが、後期にはまた遺構・遺物が確認され、古墳時代前期の期まで存続するが、規模が小さくなり、中心となる地点を南へ変化させている。また、(5)で述べるが、2遺跡ともに周辺に新たな集落が出現している。このように一方は廃絶、もう一方は移動・縮小と、様相は異なるが、視点を変えるならば集落構造の変化、中心的な居住域の廃絶・移動という点では一致した動向を考えている。

#### (3) 主要遺構

八日市地方遺跡では報告されていない遺構が多く、吉崎・次場遺跡では未調査部分が多いことから、詳しい時期や配置を明らかにすることはできない。ただし、2遺跡ともに～期には居住域と墓域、そして区画を意図した幅広の溝を見ることができる。建物遺構では居住域に平地式建物や掘立柱建物が作られ、墓は方形周溝墓ないし木棺を用いた土坑墓が採用されて遺跡内に墓域を形成していることもほぼ共通しよう。

#### (4) 主要遺物

2遺跡とも多量・多様である。弥生土器については、遠賀川系土器と櫛描文系土器といった西日本系の土器が確実に波及・定着し、さらに搬入品も見られるなど、活発な交流がうかがわれる<sup>\*16</sup>。祭祀具については、分銅形土製品、銅鐸形土製品など西日本に多い<sup>\*17</sup>形態のものが複数出土することに特徴がある。また、生産が認められる遺物は、八日市地方遺跡は木製品と玉製品、吉崎・次場遺跡は大陸系石器と玉製品が代表的なものであり、方向性はやや異なるが、物資の生産力が高い遺跡として評価できる。同時に、原料等を遺跡外から遠隔地・近郊地<sup>\*18</sup>を問わず確保し集積する機能も高かったものと予想される。また、1遺跡で消費されるであろう製品の量を遙かに超える多量の未製品が出土することから、周辺の集落あるいは地域外への供給も想定できる。

#### (5) 周辺の遺跡

2つの遺跡とも、集落のピーク期である～期では周辺に遺跡は少なくかつ小規模で、水系が及ぶエリア内に点在する状況である。そして期以降、2つの遺跡の衰微に呼応するように、新たに遺跡が出現する。新たに出現した遺跡は、規模で2つの遺跡を超えることは希であるが、水系を単位とするような複数の小地域でほぼ同時期に出現し、それぞれが遺跡群を形成する。遺跡の中には生産や祭祀、他地域との交流といった面で卓越した集落を見ることができる<sup>\*19</sup>。以降はこの群構成が基本となった消長が期まで繰り返されるようである。2つの地域において、中心的な集落の変質・解体と周辺への移動・分散がやや異なったプロセスで進行することが想定される様相と言えよう。

### 4. 拠点集落の素描

#### (1) 共通する特徴

前節での比較から、2つの遺跡には種々の様相があるが、共通する特徴も多く認めることができ。それらは以下の～のようにまとめることができよう。

地域の低地・平野部において、潟湖と主要河川が結節し、日本海へと流出する地点という交通の要衝において、安定した地勢を選択して立地する。

弥生時代の前期から中期にかけてきわめて継続性が高く、中期前半に遺構・遺物の質・量がピークに達するが、中期後半に変質し、縮小・廃絶に向かい、周辺へ移動・分散する。

遺跡の範囲は100,000m<sup>2</sup>を超えており、周辺の遺跡よりも格段に大規模である。

遺構は居住域・墓域の構成が認められ、集中域を区画する機能が付与された溝を有する。

遺物の量はきわめて多く、中でも弥生土器は遠賀川系土器の波及以降、西日本からの情報を強く受容し、櫛描文系土器を定着させている。

多量・多様な祭祀具が出土し、西日本的な祭式が卓越する状況を示す。

遺跡内で土・石・木などを素材とする製品の生産力が高い。おそらくは原材料を遺跡外から獲得・集積し、完成品は遺跡外へ供給するといった生産・流通機能が備わっていたと想定される。

#### (2) 成立・発展・変質・解体のモデル

前掲した特徴は密接に関連しあって、地域に独特の存在感を放つ遺跡を形成している。ここでは遺跡の成立から解体までのプロセスに、周辺遺跡の動向を絡めて地域のモデルを提示してみたい。

##### ~期(成立・発展)

まず、~期に遠賀川系土器を含む西日本からの情報が伝播し、海・川が結節する交通の要衝で、低地の農耕・居住適地に集落が成立する。

次いで、~期に集落は発展して規模を拡大し、遺跡内に居住域・墓域を備え、区画目的を持つ溝を設ける。そして物資を大量に生産・消費し、祭祀を執行する。この間も西日本からの情報は間断なく伝わっている。集落には地域内・地域外の情報を受信し、発信する機能も備わっており、地域内へは水系で結ばれたネットワークを介して伝達され、地域外へはやはり同様な機能を有する集落を介して伝達される。このように実際に多くの機能が集約された集落は、地域において周辺の集落に対して強い影響力を誇り<sup>20</sup>、技術から祭祀に至るまでの文化要素を主導したことが考えられ、集落そのものが地域の首長的な存在となっている(第12図)。

##### ・期以降(変質・解体)

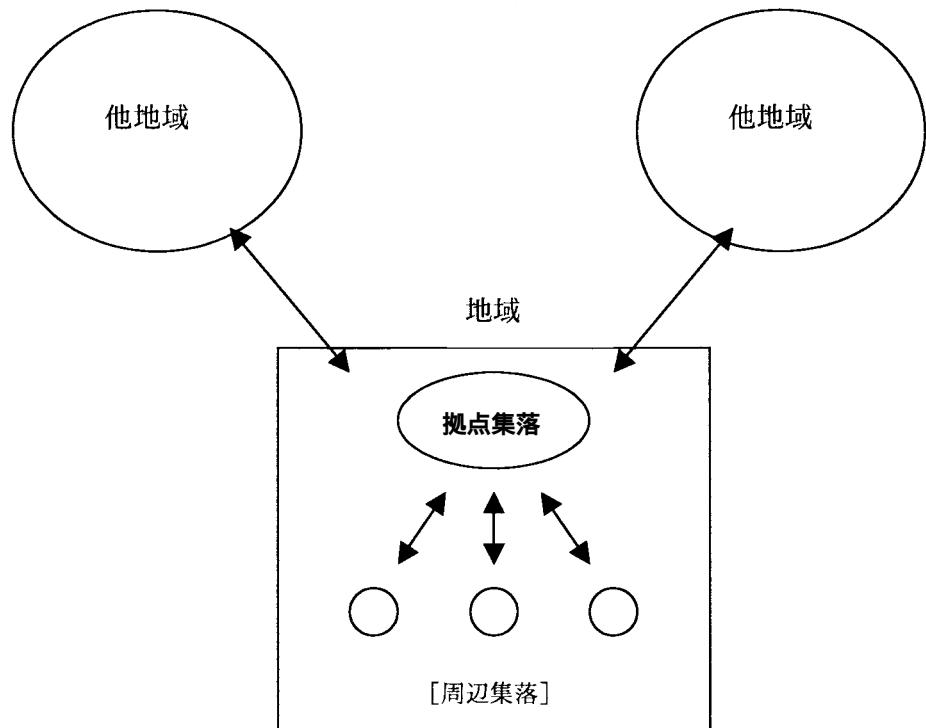
期に集落は衰微し解体に向かうが、呼応するように近隣に新しく集落が出現し、水系の上流側へ向かって移動・分散する。この段階以降、集落数は増加に転じ、水系を基盤とする小地域毎の集落群が本格的に成立し<sup>21</sup>、期まで基本的な群構成が保持される。移動・分散した集落の様相を見る限り、小地域の拠点的な存在感を有するものがあり、解体した集落の機能は分化しつつもある程度は継承されているようである。地域全体としては、~期に形成されたネットワークを骨格としつつ、新たな集落群によって再構成された社会が展開していくのであろう<sup>22</sup>。この段階においては多数の集落群を統べる階層の存在が想定され、それが地域首長と考えられる。本論でその実像を提示することは難しいが、母体は~期に発展した集落内部に求められよう(第12図)。

以上のように、2つの遺跡が北陸への弥生文化の定着に果たした役割と、それ以降の社会へ及ぼした影響はきわめて大きい。ここにあらためて八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡を北陸における弥生時代の「拠点」として評価し、「拠点集落」という名称を冠することを提唱したいのである。

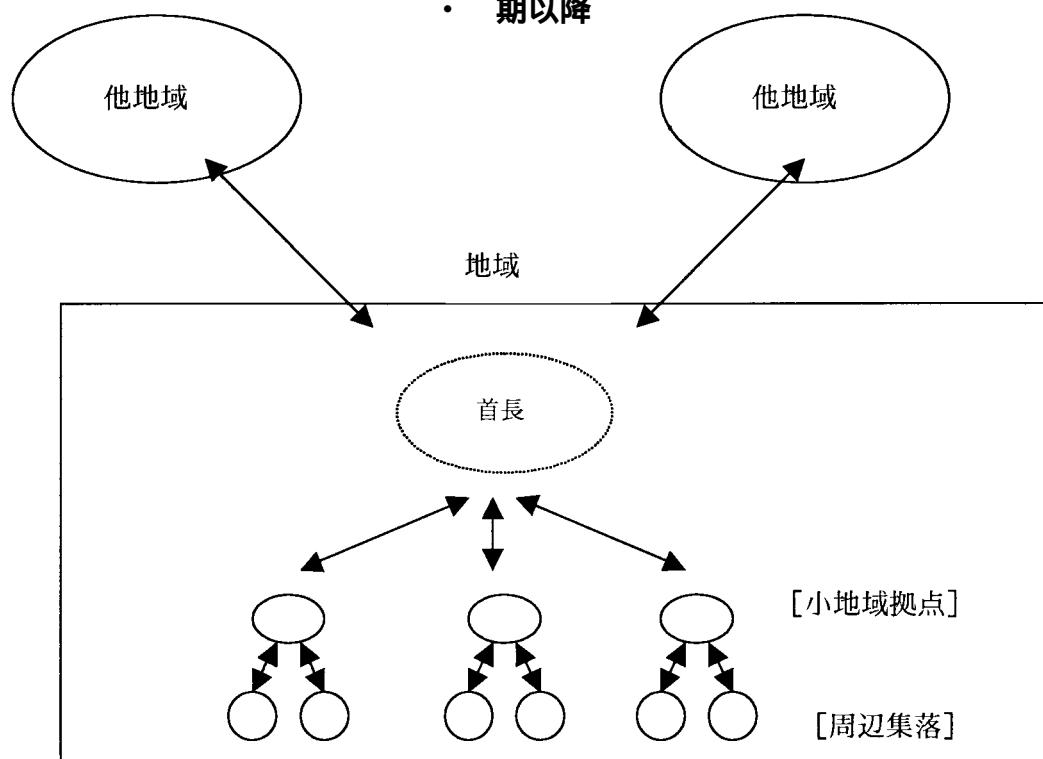
## 5. 結語

本論では「拠点集落」の意味するものに端を発して、北陸地方の代表的な弥生時代の遺跡である八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡の対比から、あらためて当地域の拠点集落像を素描し、成立から解体までのプロセスを地域社会の中で位置付ける試みを行った。その結果、弥生時代の前半期にきわめて多くの機能を集約した集落が地域を主導し、後半期には解体・分散することによって複数の小地域で以降に展開する集落群の核を形成する、という北陸における地域社会の重要な動態を抽出し得た。そして、既に検討が進んでいる東西日本のいくつかの地域と対比した際に、共通する点、相違する点が

~ 期



・ 期以降



第12図 加賀・能登における弥生時代の地域モデル 矢印はヒト・モノ・情報の動き

認識できる程度には地域像を把握できるようになり<sup>\*23</sup>、冒頭で述べた目的に対しては一応の帰結を見たものと感じている。しかし、未公表資料も含めて不確定な要素が多く、今後に多くの課題を残していることから、ここに整理して記することで結びとしたい。

まず、2つの遺跡それぞれの様相がより具体的に明らかにされることを前提として、本論で対比した各要素の再検討が必要である。次いで、遺跡間で一致しなかった特徴にも注目したい。たとえば集落構造や墓制、生産物、周辺の集落も絡めた消長などの違い等は拠点集落間でも性格差が存在する可能性が高いことを示唆し、それぞれの方向性を特定していく鍵を握る重要な様相と感じている<sup>\*24</sup>。その上で、拠点集落の領域、周辺集落との関係、拠点集落間の関係、他地域との交流、成立から解体に至るまでの社会的背景等についてあらためて追求する必要があろう。

以上のように、本論の内容は不完全なものであるが、結果として北陸における弥生時代の集落・地域・社会の構造論的研究に踏み込んだものとなっている。この内容が適切であるかどうかについては識者の評価を待ちたいが、「拠点集落」という視点は、弥生時代の地域・社会の実態を明らかにするためには欠かせないものと考える。曖昧な定義の用語を使用し、集落規模・構造・遺構・遺物を単純に比較するだけの研究では、地域の動態を把握することは至難であろう。もちろん、本論で抽出した様相が、列島各地で普遍的である必然性はないし、北陸地方においてさえ一様ではない可能性もある。おそらくは、拠点集落の有無も含めて各地で異なった様相が存在し、多様な拠点集落を介して弥生文化が地域にレベル差をもって受容される在り方こそが普遍的なのであって、それが弥生時代の地域社会に強く反映されているのではないだろうか。今後もこの視座に立ちつつ、弥生文化の本質とは何かを問い合わせていきたい。その答えを得ることが、本論も含めた私の研究で、究極の目標である。

本論は1998年6月21日に石川考古学研究会の総会で発表した内容を骨子として、最新の調査成果を加えて構成し直したものである。起草から成稿に至るまでには樫田 誠、林 大智の視点に強く啓発され<sup>\*25</sup>、多くの教示も得ている。また、羽咋市教育委員会からは調査事例について情報の提供を受け、小松市教育委員会からは掲載写真の提供を受けた。文末となつたが、記して深く感謝したい。

## 注

\* 1 田中義昭1984「弥生時代集落研究の課題」『考古学研究』第31巻第3号 考古学研究会

同1996「弥生時代拠点集落の再検討」『考古学と遺跡の保護 甘粕 健先生退官記念論集』甘粕 健先生退官記念論集刊行会

\* 2 酒井龍一1984「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財學報』第三集 奈良大学文学部文化財学科

同1987「瀬戸内海北岸における弥生セトルメントシステム」『文化財學報』第五集 奈良大学文学部文化財学科

\* 3 安 英樹1990「北陸における第 一 様式の弥生土器」『石川考古学研究会々誌』第33号

\* 4 八日市地方遺跡の内容については、主に下記の文献による。

橋本正博・宮田 明・福海貴子1999「石川県八日市地方遺跡」『邪馬台国時代の国々』(『季刊考古学』別冊9) 雄山閣

石川県立埋蔵文化財センター「2(1)発掘調査事業 八日市地方遺跡」『石川県立埋蔵文化財センターニュース』第19号

財団法人石川県埋蔵文化財センター「八日市地方遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第4号

藤 則雄1997「小松市八日市地方遺跡の花粉分析に基づく古環境解析」『金沢大学教育学部紀要(自然科学編)』第46号

- \* 5 \* 4で小松市教育委員会が把握している自然河川左岸域の面積約80,000m<sup>2</sup>に、石川県立埋蔵文化財センター及び財団法人石川県埋蔵文化財センターが調査した右岸域の潜在的な面積を加えると、およそ100,000m<sup>2</sup>を超えるものと推定できる。
- \* 6 玉のうち、緑色系管玉の素材については緑色凝灰岩と碧玉という二つの名称があり、あたかも別の種類のようであるが、その定義は曖昧で、岩石学上も大差ない。よって、本論では緑色凝灰岩に名称を統一する。
- \* 7 今回は詳しくふれないが、旧加賀三湖沿岸の遺跡群については、北西岸(柴山台地～小松砂丘)東岸(月津台地)南岸(八日市川流域)など、さらに細別が可能と考えている。
- \* 8 八日市地方遺跡周辺の遺跡については、下記の文献による。

石川県教育委員会1978『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』

同1992『石川県遺跡地図』

石川県立埋蔵文化財センター1986『漆町遺跡』

同1988a『漆町遺跡』

同1988b『白江梯川遺跡』

同1989『白江梯川遺跡』

同1990『小松市高堂遺跡』

同1992『千代』

同1995a『荒木田遺跡』

同1995b『寺井町千代デジロA遺跡・大長野A遺跡』

同1995c『寺井町佐野A遺跡』

同1997『猫橋遺跡』

同1998a『軽海西芳寺遺跡』

同1998b『猫橋遺跡』

加賀市教育委員会1993『猫橋遺跡』

小松市教育委員会1965『小松市史』(4)風土・民俗篇

同1992『銭畠遺跡』

同1993『銭畠遺跡』

同1994『松梨遺跡』

同1995『念佛林南遺跡』

同1996『荒木田遺跡』

財団法人石川県埋蔵文化財センター2000a『小松市平面梯川遺跡 第2・3次発掘調査報告書』

同2000b『小松市額見町西遺跡』

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1995『平面梯川遺跡』

同1998『八幡遺跡』

寺井町教育委員会1987『和田山下遺跡』

同1999a『佐野A遺跡』

同1999b『牛島ウハシ遺跡』

根上町教育委員会1984『根上町中庄遺跡』

なお、一針B遺跡、千代・能美遺跡は2000年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した遺跡である。一針B遺跡では、期前半の大型竪穴建物から青銅器鋳型が出土しており、青銅器の生産機能を持つ集落であることが確認されている。千代・能美遺跡では、～期の建物群が溝や川によって居住・祭祀・生産といった機能が異なるエリアに区画されて検出されており、多量の木製品を出土した川や、川に設けられた橋梁状遺構・導水状遺構等の存在と併せて首長居館を含む集落遺跡の可能性が指摘されている(現地説明会資料から)。

- \* 9 吉崎・次場遺跡の内容については、主に下記の文献による。

今井淳一2000『石川県羽咋市吉崎・次場遺跡』『月刊考古学ジャーナル』458 ニュー・サイエンス社

羽咋市教育委員会1999『史跡 吉崎・次場遺跡整備事業報告書』

石川県立埋蔵文化財センター1987『吉崎・次場遺跡』資料編(1)

同1988『吉崎・次場遺跡』資料編(2)

\*10 羽咋市教育委員会2000『羽咋市内遺跡発掘調査報告 - 住宅建設にともなう吉崎・次場遺跡第17次発掘調査報告書 - 』

\*11 今井淳一・林 大智1999「吉崎・次場遺跡出土の板状鉄斧について」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 財団法人石川県埋蔵文化財センター

\*12 林 大智2000「羽咋市吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠について」『石川県埋蔵文化財情報』第3号 財団法人石川県埋蔵文化財センター

\*13 ここでいう邑知地溝帯は、邑知地溝帯全体の南西半部分に相当する。今回は詳しくふれないが、遺跡の分布は邑知潟の北西岸となる眉丈山系の山麓、南東岸となる石動山系の山麓に明瞭に区分できる。また、羽咋砂丘については、寺家遺跡などが立地する砂丘北部が眉丈台地の群から分離される可能性があり、粟生シモデ遺跡が立地する砂丘南部(長者川流域)も、発見されている遺跡数は少ないが、一つの群をなす可能性が高い。

\*14 吉崎・次場遺跡周辺の遺跡については、下記の文献による。

石川県教育委員会1992『石川県遺跡地図』

石川県立埋蔵文化財センター1986『鹿島町徳前C遺跡(・)』

同1988『寺家遺跡発掘調査報告』

同1993『徳前C遺跡』

同1995『谷内・杉谷遺跡群』

財団法人石川県埋蔵文化財センター1999「小田中おばたけ遺跡」『鹿島町御祖遺跡群』

同2000a「久江ツカノコシ遺跡」『鹿島町久江遺跡群』

同2000b「徳丸遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第4号

志雄町教育委員会1988『杉野屋口カワリ遺跡』

同1995『二口かみあれた遺跡』

同1999『二口かみあれた遺跡第2次』

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1994『藤井サンジョガリ遺跡 高畠テラダ遺跡 高畠カンジダ遺跡』

同1995『石川県鹿島郡鹿島町曾祢C遺跡』

同1998『石川県羽咋郡志雄町荻市遺跡』

羽咋市史編さん委員会1973『羽咋市史』原始・古代編

羽咋市教育委員会1986『柴垣須田遺跡』

同1991『太田遺跡』

同1993『寺家遺跡第10次調査報告書』

同1994『三ツ屋遺跡』

同1999『太田ニシカワダ遺跡』

なお、滝谷八幡社遺跡は1999・2000年度に羽咋市教育委員会が発掘調査を実施し、～期の竪穴建物22軒を検出した集落遺跡である。粟生シモデ遺跡は2000年度に羽咋市教育委員会が発掘調査を実施し、～期の円筒形土坑や周溝状遺構を検出し、翡翠原石等の製玉関係遺物や銅鏡が出土した集落遺跡である(現地説明会資料から)。

\*15 ただし、全ての水系で水上交通が主流であったことを意味するものではない。水系沿いには河川の作用で形成される自然堤防、解析谷、河岸段丘等の地形が必然的に多くなることから、陸上交通も必然的に水系沿いに発達していく可能性も考えている。

\*16 ただし、遠賀川系土器については、現状では吉崎・次場遺跡がより多量に見受けられることから、～期の段階ではやや情報量が多かったように感じられる。

\*17 分銅形土製品と銅鐸形土製品の全国的な分布、および石川県下での分銅形土製品の評価については、下記の文献を参考にした。

角南聰一郎1993「祭祀土製品小考 - 龜井遺跡出土の分銅形土製品・新例 - 」『大阪文化財研究』第5号 財団法人大阪文化財センター

安 英樹・福海貴子2001「第4章第1節2 分銅形土製品」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 補遺編』石川考古学研究会

- \*18 例えば石器や玉の原材料については遺跡外からの入手が必要である。石器の原材料である紅麻石片岩や、勾玉の原材料となる翡翠原石などはかなり遠隔地からでないと入手できない。(藤 則雄1987「遺構・遺物 12 石器・玉類の石質とその分布地」『吉崎・次場遺跡』資料編(1) 石川県立埋蔵文化財センター)
- \*19 例えば、南加賀では一針B遺跡、千代・能美遺跡、白江梯川遺跡など、南能登では滝谷八幡社遺跡、太田ニシカワダ遺跡などをあげることができよう。
- \*20 こうした様相については、母村と分村という関係で捉えられるかもしれないが、厳密な意味では各遺跡を含んだ集団の出自まで検証が必要であり、現状では難しい。しかし、二つの遺跡が衰微する期以降の様相は、よほど極端な人口の変化がない限り、明らかに分村化を示している。ただし、八日市地方遺跡のように分村化と同時に母村となる遺跡が消滅するパターンと、吉崎・次場遺跡のように母村と分村が地域に並立して展開するパターンが考えられる。なお、八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡を除いた～期の遺跡については、小規模で遺構も明確でないことから、集落であるのかどうかという疑問も残る。本論では、時期を判別しうる遺物がある程度の量で出土している遺跡については、詳しい性格は不明ながら、人々が集った場所と見なし、集落として扱った。
- \*21 北加賀では期以降の特徴として明瞭であった(安 英樹1993「北陸南西部 1 集落の消長」『シンボジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会)が、南加賀、南能登でもほぼ同様であることが今回確認されたと言えよう。ただし、北加賀では期以前の集落、特に八日市地方遺跡や吉崎・次場遺跡に匹敵する集落が不明確であり、基本的に欠落している可能性もある。一方で金沢市西念・南新保遺跡のように、期に成立して継続する集落が存在する点にも注意したい。
- \*22 期の南加賀と南能登における地域の情報は、外来系土器で見る限り、拠点から周辺へ一元的に伝達されるという流れで一致している(安 英樹1999「北陸に於ける土器交流拠点」『庄内式土器研究』 庄内式土器研究会)。一方、北加賀では遺跡数は多いものの、拠点を特定しにくい様相が見られ、\*19で指摘した点とも関連して、ここにも八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡の存在意義を見い出すことができよう。
- \*23 共通する点を抜き出するならば、生産・交易が傑出する点は山陰地方と類似し、集落が水系を遡上して分岐する様相は近畿地方でも大和地域で特徴的である(寺沢薰「大和弥生社会の展開とその特質 - 初期ヤマト政権成立史の再検討 - 」『権原考古学研究所論集』第四)。
- \*24 例えば環濠については、環状に巡ることや、断面がV字型を呈するといった概説的な特徴は必ずしも備わっておらず、そうした防御性を重視するよりもむしろ区画内に意識的に機能・遺構を集積することに意義が求められる可能性がある。また、方形周溝墓については、今後、吉崎・次場遺跡で発見される可能性もあるが、八日市地方遺跡ではかなり先行的に導入されていた可能性もある。ちなみに、北加賀における～期の集落では、金沢市矢木ジワリ遺跡、磯部運動公園遺跡、上荒屋遺跡等で見られるように平地式建物と土坑墓という、吉崎・次場遺跡の様相に近似した構成の方が普遍的なようであり(楠 正勝・柄木英道1999「第2章 弥生時代」『金沢市史』資料編19考古 金沢市史編さん委員会)、この段階における墓域の形成や集落との配置に多様性を感じさせる。生産物については方向性の差異を示すとともに、相互の補完的関係も考慮する必要がある。消長については、八日市地方遺跡におけるピーク期の遺構密度の高さとその後の急速な廃絶は、吉崎・次場遺跡における高い継続性と好対照をなしており、前者に地域の都市的集落、後者に伝統的集落としての側面を兼ね併せる視点も必要と考えている。
- \*25 両氏の著した文献を以下に掲げる。どちらも正式に刊行されたものではないが、理論的かつ示唆に富んだ視点で北陸の拠点集落を考えた内容である。
  - 林 大智1998「北陸における弥生時代集落の体系的理理解に向けて」石川考古学研究会新年例会資料集
  - 樺田 誠1999「弥生時代のムラ - 八日市地方遺跡 - 」古代学協会公開講演会資料集